



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道における貝塚文化の消長 : 縄文時代～近代の生業と祭祀
Author(s)	青野, 友哉
Relation	地域と文化の考古学 II / 明治大学文学部考古学研究室 編. ISBN:978-4-947743-70-1. pp.309-325.
Issue Date	2008-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/48506
Type	journal article
File Information	aono_61.pdf



北海道における貝塚文化の消長—縄文時代～近代の生業と祭祀—

青野友哉

はじめに

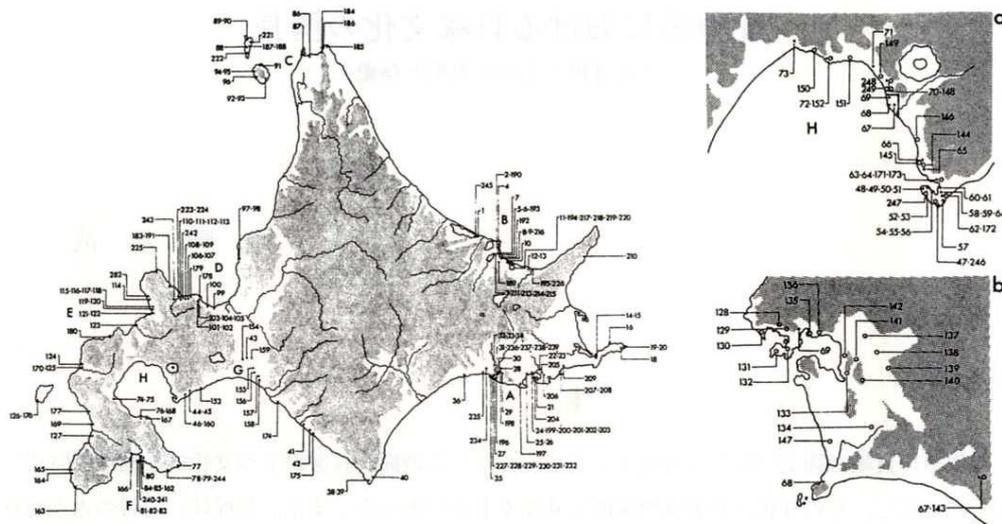
北海道の貝塚は縄文早期から近代までつくられた。この間、貝塚がもつ文化的な意味は時代とともに変化し、その変化の仕方は地域的に異なるものであった。また、貝塚は、当時の人々の狩猟・漁撈・採集活動の結果として存在するとともに、さまざまな儀礼の結果として形成され、彼らの精神文化を表象するものとの見方もある（河野 1935, 宇田川 1985a, 1985b）。そのため、貝塚は生業研究の一部として取り上げられるだけではなく、祭祀研究としての視点でも扱われる必要があるのである。

本論ではこの点をふまえ、北海道における縄文時代から近代までの生業について述べるとともに、その主体をなす貝塚について祭祀的な面でも言及し、生業形態の変化と、貝塚がもつ意味合いの変化の関連性を指摘するものである。

なお、ここでいう貝塚文化とは、「貝塚が存在する文化」という消極的な意味合いではなく、「何らかの精神性を反映する貝塚がつくられた文化」として用いている。

1. 北海道の貝塚の概要

北海道の貝塚については大島直行が、酒詰仲男の集成（酒詰 1959）以降、十分に整理されることのなかった道内貝塚遺跡の分布状況を概括している（大島 1984）。大島は酒詰が掲載した 127 箇所新たに 122 箇所を追加し、道内を A～H までの 8 地域に分けて特徴を述べている（第 1 図）。



第 1 図 北海道の貝塚分布（大島 1984 より転載）

これを時代順に見ると、最も古い貝塚は縄文早期の東釧路貝塚やテンネル南貝塚であり、この時期の貝塚は「道東海岸地域」(A) (大島 1984, 以下同じ) にのみみられるという特徴がある。

縄文前期から中期にかけては「津軽海峡地域」(F) や「苫小牧低地帯地域」(G), 「噴火湾沿岸地域」(H) で比較的大きな貝塚が現れるようになる。この時期のもう一つの特徴は、伊達市北黄金貝塚や八雲町コタン温泉遺跡のように、貝塚中に人骨を伴う墓坑が多数存在する遺跡があることである。また、縄文中期の貝塚は検出例が少ないが、洞爺湖町(旧虻田町) 入江貝塚や函館市(旧南茅部町) 大船遺跡のように貝類の割合が少なく、獣骨・魚骨が多い貝塚が存在する。

縄文後・晩期には「石狩湾南岸地域」(D) や「積丹・檜山海岸地域」(F) といった日本海側でも貝塚がみられるようになる。後期の特徴は墓を伴う貝塚と伴わない貝塚の両者があり、また、函館市戸井貝塚や伊達市ポンマ遺跡といった獣骨集中がみられる貝塚があるなど、多様な形態をとる点である。

縄文晩期は全道的に貝塚の数が少なく、比較的多い道南西部地域でも 6 遺跡しか存在しない。近年調査された洞爺湖町高砂遺跡の晩期貝塚例は貴重といえる(角田 2005)。

これに比べ、続縄文前半期は全道的に貝塚が多くみられるようになる。恵山貝塚に代表される道南西部の恵山文化の遺跡や、道東北部の興津・下田ノ沢文化及び宇津内文化に属する遺跡で多くの貝塚が検出されることや、豊富な骨角器の存在、さらに海岸部に近い遺跡立地から、この時期により一層海洋漁撈中心の生業形態となったとされている(藤本 1983)。ただし、続縄文後半期は貝塚の検出例はほとんどなく、伊達市有珠オヤコツ遺跡(旧南有珠 7) SH073 にその可能性がある程度である(峰山・大島・瀬川 1984)。この時期は貝塚だけではなく、住居跡の検出例もほとんどないことから、遊動的な生活であったとの見解もあり(石井 1997)、実態がつかめていないのが現状である。

続く擦文期の貝塚も全道的に検出数は少ないが、奥尻町青苗貝塚のある「積丹・檜山海岸地域」(F) と有珠オヤコツ遺跡(旧南有珠 7 遺跡) のある「噴火湾沿岸地域」(H) では検出例がある。この他には釧路市 STV 遺跡や名寄市智東 H 遺跡、小平町高砂遺跡など、カワシンジュガイの堆積層がみられる例も存在する(高杉 1987)。

また、オホーツク文化の貝塚は網走市モヨロ貝塚のある「網走・斜里海岸地域」(B) とオンコロマナイ貝塚や香深井遺跡のある「道北海岸地域」(C) に存在している。

中・近世アイヌ文化期の貝塚については宇田川洋が集成し、時期別に分類している(宇田川 1985a)。そこでは 16 世紀の貝塚として余市町天内山遺跡や新ひだか町駒場貝塚などの道南西部の 4 遺跡、17~18 世紀の貝塚として道北や道東地域も含めた 14 遺跡を、19 世紀の貝塚として小樽市桃内貝塚や余市町ヌッチ川貝塚など道南西部日本海側の 3 遺跡があげられた。現在はさらに例数が増えており、19 世紀の幕末から明治期にかけての貝塚が伊達市と苫小牧市で検出され、分布が拡大したものの全体的な傾向は大きく変わらない。

ここで注意されるのは、擦文期に引き続き 13 世紀から 15 世紀の貝塚の検出例がないことである。これは中世アイヌ文化期の墓や集落の検出例の少なさと関連あろうが、年代決定の指標の欠如が原因とも考えられる。

以上のことから、縄文早期から近代にかけての北海道の貝塚は、全道的につくられる時期と、地域が限定される時期とがあることがわかる。それと同時に、「噴火湾沿岸地域」や「道東海岸地域」のように各時代を通して貝塚がつくられ続ける地域も存在する。これらの違いは何に起因するのだろうか。当然、自然環境の違いや、その変化による影響を受けていることは想像に難くないが、それだけではなく人為的な、文化的な影響によることも考えられる。さらに、貝塚の性格は単一ではなく、いくつかの要素の複合により多様な性格をもつと思われる。これらについては後述することとする。

2. 縄文時代から近代の生業

縄文時代から近代までの生業をみると、狩猟・漁撈・採集のみの時代と、一部に農耕を取り入れた可能性がある時代、確実に農耕を行っていた時代に分けられる。ただし、農耕が生業全体に占める割合の把握や、貝塚などの遺構に表れる商品経済の影響による結果をいかに的確に捉えるかが問題となっている。

(1) 各時代の生業

a 縄文早期～続縄文期

北海道の縄文時代の生業が狩猟・漁撈・採集によるものであることは疑いの余地はないであろう。問題となるのは続縄文期以降である。弥生前期に稲作技術が東北地方北部で採用されて以来、道南西部の恵山文化の人々はそれらの情報を確実に知っていたであろうことが、伊達市有珠オヤコツ遺跡出土の田舎館式土器の無頸壺や同市有珠モシリ遺跡出土の蓋の存在からうかがえる。また、北斗市（旧上磯町）茂別遺跡でアサとヒエ属の、余市町大川遺跡でアサとキビの炭化種子が出ているように雑穀農耕が行われた可能性も指摘されている（山田 1998）。今後、大野平野など内陸よりの低地部分で農耕の痕跡が見つからないとは言い切れないが、この時期の道南西部の遺跡立地や貝塚の存在から漁撈と狩猟が主な生業と考えるのが妥当であろう。一方、北方起源とされるソバの花粉が道内各地から検出されており、雑穀農耕の有無を北方地域との関連でも検討する必要が出てきている。

続縄文後半期は集落と明確に判断できる遺構がほとんどなく、実態があまり把握されていない。しかし、先の遊動生活説に関連して、石井はこの時期に自給自足のための生業とは別に、交易品とするためにサケやシカ、クマなどを獲得する「交易のための生業」が付け加わったとして、当該期を北海道における生業の転換期として位置づけている（石井 1998）。

b 擦文期

擦文期の遺跡からは住居址内の炉址や竈址周辺で炭化作物種子が検出される例が増加している。しかも、出土量が縄文期と比べると格段の差である。山田悟郎によると 38 遺跡からコメ、オオムギ、コムギ、アワ、キビ、ヒエ、ソバ、アズキ、アブラナ科、ウリ科等 16 種類の炭化作物種子が出土しているという（山田 1998a）。出土地域は石狩低地帯の北半部に集中し、部分的に網走地方、釧路地方にもみられる。だが、これらの作物が実際に遺跡の周辺で栽培されていたものか、他地域からの搬入なのか、あるいはその両方なのかは畠跡の検出がみられず、現段階では不明である。しかし、作物種子が多く検出される石狩低地帯及び周辺では鉄製鎌 31 点、鋤先（鋤先）11 点が出土している（山田 1998a）など、実際に栽培が行われていた可能性が非常に高い。

これと同時に石狩低地帯周辺では河川漁撈の痕跡も見つかっている。札幌市サクシュコトニ川遺跡ではサケの遡上止め漁場址が検出されている。瀬川拓郎は 10 世紀以後、石狩川水系の産卵場地帯に擦文期のムラが立地することから、本州地域との交易品とすることを目的にサケの大量捕獲がなされたと考えている（瀬川 2004）。さらに、日本海側の主要河川の河口付近に交易拠点がつくられたこととも関係するとしている。

上記のことは、擦文期に北海道が本州文化の経済的な枠組みに組み込まれることに伴い、一部の地域では生業の比重が変わったことを示している。ただし、噴火湾沿岸と奥尻島では擦文期の貝塚が存在している。これらの貝塚の内容が交易目的か自家消費の結果によるものかの検討も必要であるが、海洋漁撈を主たる生業とする地域があることも見逃せない。

なお、同時期の道東北部のオホーツク文化の遺跡では多くの貝塚が残されている。礼文町香深井 1 遺跡における貝層中の動物遺存体の肉をカロリー量に変換すると、魚類が 80%、海獣類 6%、ウニ 6%、家畜（イヌ・ブタ）2.9%という傾向がみられるという（大場・大井編 1981）。また、天野哲也によるとこのような魚類など海産物への依存構造はオホーツク文化全体の特徴であるという（天野 2003）。また、陸獣については、シカの出土が少なくキツネやクロテンが多いことから、食料以上に毛皮の入手としての意味が強かったと述べている。

つまり、道東北部を除き、擦文期に貝塚が少なくなる原因は、本州地域との交易を目的とした河川漁撈や狩猟の割合の増加と、それが可能にした穀物の搬入、栽培にあったと思われる。

c 中・近世アイヌ文化期

中世アイヌ文化期は貝塚及び他の遺構も検出されにくいという点で、実態が把握できない時期である。一方、近世アイヌ文化期は貝塚や畠跡が検出されており、積極的な議論がなされている。

貝塚については佐藤孝雄が貝類と海獣類、魚類の出土量の割合などから和人と交易や漁法の技術伝播について述べている（佐藤 1997）。佐藤は中・近世の貝塚の中に、アワビやホタテガイ、アザラシ類が大量に出土する遺跡があることに注目した。これらは縄文早期～縄文期を通して大量に出土した例はほとんどないという。例外として縄文前半期の礼文町浜中 2 遺

跡でのアワビや、オホーツク文化にみられる海獣骨の大量出土があげられるのみである。

これについて佐藤は肉や毛皮を和人との交易に用いるために集中的な採集・捕獲を行った結果だとしている。また、アワビやホタテガイにみられる鉄製刺突具による穿孔も、浅瀬のみならず深場に生息する貝をヤス漁で捕るなど、漁獲量増大の必要性を示す資料であるとしている。

さらに、貝塚の性格の違いについて次のように指摘している。

有珠オヤコツ遺跡（竹田・千代・福田 1993）の貝塚 SH045 はニシンが全体の 90% を占めることから、交易品としてカズノコを加工した際に生じた「コタン共同の貝塚」（佐藤 1997）、SH031 と SH033 はニシンが少なく、カサゴ類とアイナメ類がそれぞれ 40%、60% を占めるため、日常生活の中で消費した「世帯（個人）単位の貝塚」であると貝塚の成因の違いを述べている。この点に関して宇田川洋は「アイヌ期の中での時代的な変遷および地域的な違いをある程度に把握できてから、再度検討すべき課題である」（宇田川 1985a）として慎重な姿勢を取っている。しかし、後に述べる大島の見解でも、「送り場」的要素をもつ貝塚と「捨て場」的要素をもつ貝塚の内容の違いをみると、ニシンの有無という点もあてはまっているなど、佐藤の指摘は示唆に富むものといえる。

（2）近世における畠の存在

近年、北海道内の畠跡の検出例が増加している。畠跡は、1965 年の洞爺湖町高砂貝塚の発掘調査により峰山巖が指摘していたものの、その後はあまり注目されなかった。1997 年に同遺跡の史跡整備に伴う発掘調査により、1663 年降下の有珠 b 火山灰（Us-b）に覆われた良好な畠跡が検出されたことを契機に改めて認識されるようになった。その後、道南西部を中心に全道的に検出され、現在では 16 遺跡の例がある。これらは和人かアイヌかという耕作者の問題とともに、北海道における中・近世の生業を考える上で重要な遺構である。

a 畠跡の年代

畠跡の年代は火山灰との関係から 17 世紀中頃のものが多いが、千歳市キウス 5 遺跡例は 1739 年直前、別海町野付通行屋遺跡は 1799 年頃と推定されており、18 世紀の例も存在する。最も古い確実な年代は 1640 年降下の駒ヶ岳 d 火山灰（ko-d）に覆われた伊達市ポンマ遺跡、七飯町桜町遺跡、北斗市館野遺跡、森町上台 2 遺跡などの道南西部の大半の畠跡がこの時期である。これらは畝と畝間の凹凸が保たれた状態で火山灰に覆われており、1640 年直前と考えられる。

横山英介は北斗市館野遺跡について、畠跡の上面から駒ヶ岳 d 火山灰までの間に厚さ 3 cm の自然堆積土があることから、同様の特徴をもつ七飯町桜町遺跡とともにさらに古くさかのぼる可能性を指摘している（横山 2005）。いずれにせよ、これらは 10 世紀初頭降下とされる白頭山－苫小牧火山灰（B-Tm）の上位で検出されているため、10 世紀をさかのぼることはなく、本州東北部で多く検出されている古代の畠跡に比べると新しいといえる。

b 北海道の畠跡の特徴

平面及び断面形態はどの例も近似している。心間距離についてはほとんどが 1～1.5m の範

畝といえる。畝の切り返しは、桜町7遺跡では最低3回は行われた(石本・横山ほか1999.3.31)とされているが、桜町遺跡やポンマ遺跡では1回のみである。他の遺跡では切り返しはみとめられないか、不明で、総じて回数は少ないといえる。

畝の方向について、1筆ごとの畝の方向が同じ例は七飯町桜町遺跡や森町上台2遺跡など、渡島半島南部に多い傾向がある。これは本州東北部と同じ傾向である。これに対し、桜町7遺跡と高砂遺跡・ポンマ遺跡は畝の方向が異なる筆が存在し、面積的にはわずかだが一部分重複する場合もある。

高砂遺跡において畝方向が異なる筆があることについて、山田は「台地上を移動しながら小規模な単位の畝を継続してつくった結果」と捉えている(山田1998b)。

以上のことから、畝の方向が統一され、切り返しも存在する渡島半島南部地域と、切り返しをあまり行わずに小規模な畝を移動させていた噴火湾北岸地域という区分ができそうである。これは和人地に近い地域とそれ以外の地域では農業形態が異なることを示すものである。

c 畝の耕作者

これまでに洞爺湖町高砂遺跡と伊達市ポンマ遺跡については遺跡内のアイヌ関連の遺構が主体を占めることや、周辺の遺跡の内容がアイヌ的要素を強くもつという状況証拠によって、耕作者はアイヌ民族である可能性が高いと考えてきた(青野2000)。一方、道南部の七飯町桜町遺跡と桜町7遺跡の「畝状遺構」について、調査者は和人の可能性を示唆しているが断定はしておらず、和人地に近い地域だけに判断が難しい。伊達市や洞爺湖町においても畝跡の年代である1640年直前から1663年までの間では、既に有珠善光寺及び有珠場所が開設されており、和人の存在は確実であるため、和人による畝の存在も十分に考えられる。つまり、地域によって和人が入ってくる時期が異なることや、一つの地区内に和人とアイヌが混住している状況を考えると、一概に時期や地域で耕作者の違いを示すことはできないことがわかる。

つまり、耕作者については、各遺跡において畝跡と集落の関係を確認し、総合的に判断するしか方法はないのである(青野2000)。そのように考えると、現時点では別海町野付通行屋跡遺跡のみがその判断を可能にしている。野付通行屋は1799(寛政11)年に幕府によって設置されており、建物跡と畝跡の位置関係からすると、和人によるものである可能性が高いといえる(横山2005)。

しかし、噴火湾北岸地域にみられる畝跡の全てが、仮に本州から移住した人々による耕作であったならば、多くの本州検出の畝跡がそうであるように、等高線に沿った方向に畝立し、一定の土地を切り返ししながら、地力の回復を施肥によって補うことがなされるであろう。

また、高砂貝塚とポンマ遺跡、有珠オヤコツ遺跡の畝跡は調査区外へと広がっており、近隣の平坦部には同様の畝跡が存在する可能性がある。さらに、畝跡が検出された遺跡及びその周辺には物送り場の状況がみられる貝塚やチャシといった、近世アイヌ民族による遺構が複数存在する。

このことから判断すると畝の耕作は、本州からの移住者のみが行ったと考えるわけにはいか

ず、近世アイヌ民族も行ってた可能性が極めて高いといえる。

d 作物

検出された畠跡で実際に栽培された作物の種類が特定された例は現段階まで存在しない。

植物考古学的には炭化種子が 8 遺跡から 11 種類出土している（山田 2000）。山田によると、これらは札幌市 K39 遺跡大木地点や平取町二風谷遺跡、イルエカシ遺跡、ピパウシ遺跡のほか、千歳市や伊達市で出土し、主に焼土に伴った炭化種子である。種類はコメ、アワ、ヒエ、キビ、アサ、シソ属が主である。これらが北海道検出畠跡での栽培作物である可能性はもちろんあるが、搬入品であることも当然考えられるため、断定はできない。

また、種子として残りにくい作物であった可能性もある。1717（享保 2）年の『松前蝦夷記』中には「粟 稗 大豆 小豆 牛蒡 大根 瓜 茄子 麻 多葉粉」が松前周辺の畠で採れるとの記述がある（山田 2000）。根菜類などは炭化物として種子が残りにくいいため、遺跡での出土が少ないと考えられる。さらに、アワやヒエなどの穀物類は北海道での栽培と他からの搬入の両方が考えられるが、根菜類が搬入されることは保存の面からみてほとんどないであろう。

なお、コメについて山田は「美々 8 遺跡では籾付きのコメや籾が出土し、0B 層上部からイネ属葉身機動細胞の機動細胞珪酸体が多量に出土しており（鈴木 1997）、稲作が試みられた可能性は否定できないが、今のところは出土したコメについては本州からの移入と考えられる」（山田 2000）と近世アイヌ文化期の稲作の可能性も考えながら、慎重な態度を取っている。

（3）生業の割合

北海道の縄文時代から近世までの生業についてまとめると、縄文時代は各時期・各地域により割合に差はあるであろうが基本的に狩猟・漁撈・採集に依っていたといえる。

続縄文期は雑穀などの栽培が一部あった可能性はあるものの、貝塚の多さや、内容物である魚類や海獣類の量から判断して、主たる生業は海洋漁撈と狩猟・採集であったといえる。ただし、石井が指摘するように続縄文後半期に「交易のための生業」の萌芽がみられ、以後も地域的に活発化すると考えられるため、この時期以降の遺構・遺物を評価するうえでの留意点といえる。

擦文期は、石狩低地帯北半部地域で栽培、あるいは交易品として入手した穀類を食していたことは間違いない。この地域では河川漁撈や狩猟を基にした交易と農耕が複合した生業形態であった可能性が高い。このような形態は日本海沿岸の交易拠点にも基本的に当てはまると考えられるが、その土地ごとに交易品の種類や割合が異なっていたことが想像できる。

また、奥尻町青苗貝塚や噴火湾東岸地域においては貝塚の形成がみられ、海洋漁撈を主たる生業とする地域も存在する。さらに同時期のオホーツク海沿岸地域も海洋漁撈中心の生業であった。

これらのことから擦文期は、それ以前の生業活動とは区別されるべき、交易目的による狩猟・漁撈が本格化し、農耕の存在とあわせて、異なる生業をもつ小地域が存在した時期といえる。

中・近世アイヌ文化期は貝塚が増えるが、佐藤の指摘にもあるように噴火湾東岸地域のホタテガイや礼文島のクロアワビ、知床半島沿岸域でのアザラシの大量出土が示すように、交易目的の狩猟・漁撈による可能性があり、商品経済の影響範囲が拡大したとも考えられる。それとともに道南西部を中心に全道的に畠跡が検出されていることから、農耕も確実に存在している。当然、石狩低地帯など各地で河川漁撈が引き続き行われていたであろうことから、生業の割合は各地域によって異なっているといえる。

ここにたって、貝塚を生業の面から見てみると、各時代を通して貝塚をつくる地域は存在することから、狩猟と漁撈が北海道における生業の主体をなすものであることは間違いない。しかし、時代が新しくなるにつれ、商品経済の影響を受け、ある時はその数が減少し、ある時は増加するものの特定種に偏った内容となるなど、変化を生じてきた。

では、これらの生業の変化は貝塚に対する人々の意識にどのような変化をもたらしたであろうか。貝塚のもつ祭祀的な面にも着目する必要があるだろう。

3. 貝塚の祭祀的要素

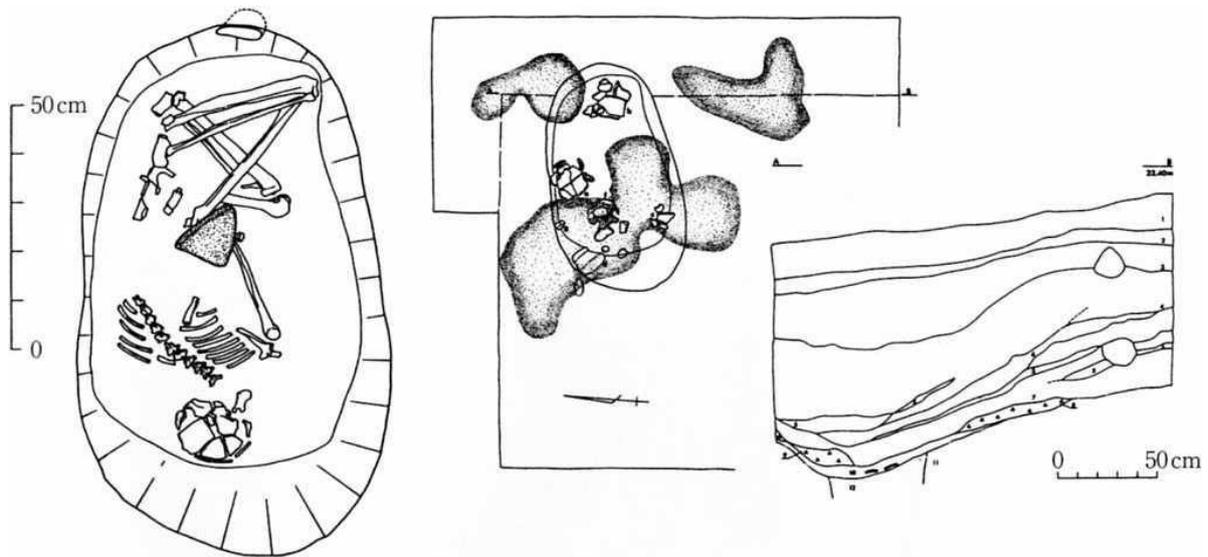
(1) 貝塚の要素

河野広道は「貝塚は、少なくともアイヌの場合には、(中略)「物送り場」の跡であって、物の霊を天国に送った「骸」の置場である。(中略)「物送り場」はタブーにより汚すことを厳禁され、物送り場に物を送るのは、一定の儀式と祈りとを捧げた後になされた。だからこそ、霊の上天した人間の遺骸をも亦貝塚に葬ったとて何の矛盾もない」(河野 1935)と述べ、縄文時代の貝塚から墓が検出される理由をアイヌの物送り場に対する考え方を援用して説明した。この「貝塚=物送り場」との考え方は一部の研究者において踏襲されてはいるが、すべてがそうではないと批判的な見方をする研究者もいる(佐藤 1997)。また、多くの研究者が「ゴミ捨て場」としての認識をもつのは、事実、墓を伴わない貝塚や、祭祀的な痕跡を持たない貝塚が存在するためであろう。

河野自身も「石器時代後期から金石併用時代の全期に亘る北海道式薄手縄紋土器期の遺跡では(中略)物送り場と墓とは、多くの場合に立派に区別されて」(河野 1935) いると、時代が下ると貝塚中に墓がつくられなくなることを指摘し、その理由として、「死者に対して親しみよりも畏れを甚だ強く感ずるようになったため」としている。ここでは、墓との関係はもとより、貝塚には異なるいくつかの性格があると仮定し、それらの時期的な変化傾向がみられるかどうかを検討したい。まずは考えられる以下の4要素(墓地的要素・動物儀礼場的要素・道具儀礼場的要素・廃棄場的要素)を抽出する。

a 墓地的要素

貝塚と同じ地点に同時期の墓が存在し、墓地としての利用がみられる例が存在する。貝塚と同一層序から掘り込まれた墓及び貝層中に埋葬されている場合がそれである。



第2図 伊達市北黄金貝塚036調査区検出墓坑（北黄金13号人骨）

伊達市北黄金貝塚のA地点貝塚（縄文前期後半）では貝層中及び貝層下から人骨を伴う墓坑13基が検出された（峰山・大島・百々1986）。貝層下の墓坑の一例である036調査区検出墓坑（北黄金13号人骨）は壙口部副葬の土器が円筒下層c式であり、貝塚の時期（円筒下層c式～d式）と同じである（第2図）。つまり、貝層下の墓坑であっても、墓坑と貝塚が同時期に、ほぼ同じ地点につくられ始めているのである。その後、1ないし、2土器型式の時間幅で次第に両者が重なり合うようになったと考えられる。最終的な貝塚の規模は東西約80×南北20mである。

八雲町コタン温泉遺跡の第3貝塚は縄文前期後半～後期初頭までの貝塚である。貝塚の上・中・下の各層から計20体の人骨が出土した。4号人骨は縄文前期円筒下層d式の時期の貝層である5k層の上面で検出された。この例は掘り込みをもっていないが屈葬の埋葬姿勢を保っているため、浅い掘り込みか、遺体上に土を覆った構造だった可能性がある。掘り込みをもつものは3体のみであるが、他の例も多くは屈葬であり、埋葬例であると判断できる。この例も数土器型式の期間、貝塚と墓が同地点につくられていたといえる。

同様の例は洞爺湖町入江貝塚の縄文後期初頭の貝塚及び同時期の高砂貝塚のC地点貝塚（大島・百々編 1998）、続縄文前半期の豊浦町小幌洞穴遺跡（大場 1963）、礼文華遺跡（松田・青野 2003）、伊達市有珠オヤコツ遺跡〔旧南有珠7遺跡〕SH039（峰山・大島・瀬川 1984）、余市町入舟遺跡SM-1（乾 2000）などがあげられる。

b 動物儀礼場的要素

貝塚には動物儀礼の痕跡を残す例がみられる。動物儀礼との呼称は、動物に対する儀礼と、動物を用いた儀礼、さらにはその両方について、すべてまとめて用いている。前者は中・近世アイヌ文化期の遺跡にみられるように対象となる動物自体が儀礼の主体となるものであり、後者は、何らかの儀礼を行うために必要なものとして、ある種の動物や動物骨が用いられたもの

をいう。後者の例として、後述するポンマ遺跡の鯨骨加工品とシカの肩甲骨の置かれた状態などがあげられる。もちろん、特別な扱いを受ける動物は両者の意味を併せもった儀礼がなされることがあったであろう。

西本豊弘は動物儀礼の認定基準として次の4つのうち少なくとも2つが当てはまらなければならないとしている(西本ほか1993)。
 ①頭蓋骨が複数伴うこと、
 ②意図的な配列がみられること、
 頭蓋骨に加工が施されていること、または焼かれている

こと、
 ④施設が設けられていることである。確かにこれらの基準に当てはまるものは動物儀礼として認められるであろう。しかし、確実な例を示すと同時に、わずかな痕跡しか残らないものの中で可能性のあるものを見つけ出す努力も必要と考える。

函館市戸井貝塚は後期初頭の貝塚のⅢ層下部に獣骨集中域が存在した。獣骨集中域は6×5mの範囲内に最小個体数でエゾシカ54、オットセイ25、アシカ7、トド3などの頭蓋骨を含む全身部位が出土している(第3図)。貝塚全体の範囲が推定で約20×20mと考えられているが、その中の一部分に獣骨が集中するのは何らかの意図があることは間違いない。しかし、調査担当者である西本は、先の基準の①しか当てはまっておらず、儀礼的取り扱いとは認めず、「日常的な解体・調理・廃棄の結果」と結論づけている。

伊達市ポンマ遺跡17号貝塚は縄文後期初頭の貝塚で、動物遺体に特殊な出土状況がみられた例である(青野・小島1999)。1.05m幅のトレンチ状の調査区で検出された貝塚の範囲は約4mであり、さらに調査区外に広がっている。この約4×1.05mの範囲内に以下のような4箇所の動物に関わる出土状況がみられた。

一つ目は、シカの頭骨1個が被熱礫4点に取り囲まれた状況(写真1-1)。二つ目は、シカの第1切歯24本が直径20cmの範囲内に置かれた状況(写真1-2)。第1切歯は左右ともに各12本出土しており、最小個体数は12体である。三つ目は、周囲を研磨したクジラの椎骨の加工品がシカの肩甲骨上に置かれていた状況(写真1-3)。両者の間には土の堆積はみられない。四つ目は、左右3対のホタテガイが上下から挟み込まれるような状態で重ねられた状況(写真1-4)。



第3図 函館市戸井貝塚検出獣骨集中域 (P:土器, S:石もしくは石器)

これらは先の動物儀礼の基準には合致しないものである。しかし、何らかの儀礼を行った痕跡は色濃く残されていると考える。

続縄文前半期の豊浦町礼文華貝塚は峰山巖により動物儀礼の存在が指摘されている（峰山1972）。

一つ目は、直径1m、深さ20cmの土坑内にイルカの頭骨5個を並べた例。二つ目は、貝層を浅く掘りくぼめた中にクジラの椎骨1個を入れ、周りを十数個の礫で囲み、さらに石を積んだ例である。

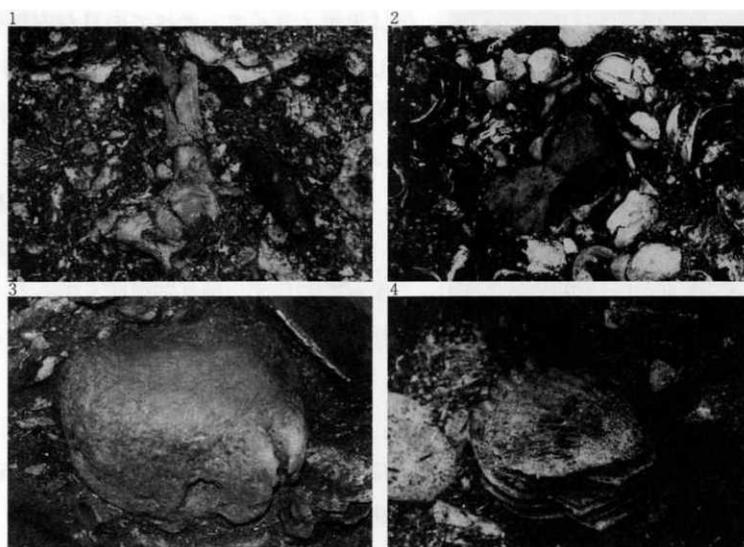


写真1 伊達市ボンマ遺跡17号貝塚における動物遺存体の特殊な出土状況
1. シカの頭骨, 2. シカの切歯の集中, 3. シカ肩甲骨上のクジラ椎骨,
4. 重ねられたホタテガイ

また、アイヌ文化期の貝塚の内、クマ送りやフクロウ送り、貝送りなどの動物を対象とした「送り場」とされるものは、まさに動物儀礼場的要素をもっているといえる。

宇田川洋は中・近世アイヌ文化期の送り場を、つくられる立地条件や構成要素から7型式に分類し、その内の一つに「(5) 貝塚、貝層を形成している例。骨塚といわれるものを含む。」をあげている。つまり、送り場は「道具送り」や「貝送り」、「クマ送り」といったそれぞれの儀礼の結果として形成されるのであり、貝や動物骨を含まないものもあるのである。しかし、逆に物送り場に存在する貝や動物骨は、道具送りされた道具と相伴していることから、これらについても同様に送り儀礼がなされたと考えることも可能である。

貝類が儀礼的に扱われた可能性のある例としてボンマ遺跡10号貝塚がある。この貝塚は現存値で80×40cmの小貝塚で、二つの火山灰との関係から1640～1663年の年代が与えられる。貝種はオオノガイで、すべての貝が内側を上にして出土した（写真2）。中には5～6枚を入れ子状にした箇所もあり、丁寧に置かれた状態と考えられる。貝塚は有珠b火山灰（1663年降下）直下にあることから、置かれた直後に火山灰で覆われた稀な例といえる。逆に考えると、多くの貝塚の貝は形成時の状態を保っておらず、儀礼的痕跡を失ったものもある可能性を考慮しなければならないと考える。

c 道具儀礼場的要素

貝塚には道具儀礼の痕跡を残す例がみられる。道具儀礼とは道具に対する儀礼と道具を用いた儀礼を合わせた意味で使用している。つまり、日常的に用いる利器や、儀式用の祭器、あるいは祭

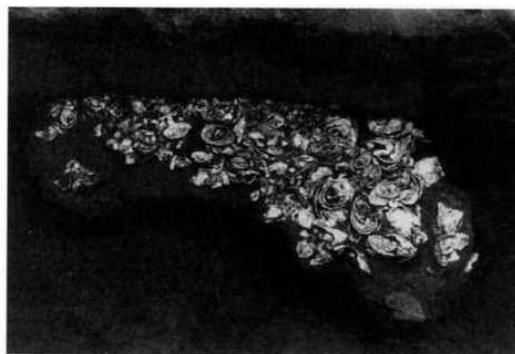


写真2 伊達市ボンマ遺跡10号貝塚

器に転換された利器が儀礼的扱いを受けたと判断できる出土状況の場合をいう。

縄文前期の北黄金貝塚の A'地点貝塚からは鯨骨製骨刀が灰層中から出土した。骨刀は熱を受けており、形は歪み、変色している。この例は祭器である骨刀と火を用いた何らかの儀礼、あるいは骨刀の廃棄に関わる儀礼が行われたと考えられる。

縄文中期の函館市大船遺跡では、3本に折った鹿角製の縫い針が並べられた状態で出土しており、調査者は「儀式をしたと理解できる痕跡が認められる」（阿部 2001）としている。

近世アイヌ文化期のせたな町瀬田内チャシ B6 貝塚は貝類や動物骨とともに鉄鍋や刀子などの鉄製品、陶磁器や骨角器が出土しており、「物送り場」として扱われている（宇田川 1985b）。これら中・近世アイヌ文化期の物送り場としての貝塚はまさに道具儀礼場の要素をもつといえる。

d 廃棄場の要素

ある程度まとまった量の貝塚でありながら、人工遺物を伴わずにわずかな動物遺存体の種類で構成され、かつ儀礼的痕跡を持たない貝塚は廃棄場の要素をもつといえる。

有珠オヤコツ遺跡 SH045（竹田・千代・福田 1993）は 7×2m の調査区全域に広がる厚さ 4～5 cm の貝塚で、1663 年以前の近世アイヌ文化期のものである。この貝塚からはアサリ、ホタテガイがみられるとともに魚骨を多く含み、魚骨の割合の 90% 以上をニシンが占めるという特異な状況を示している（佐藤 1997）。ちなみに他の種類はカサゴ類とアイナメ類である。

佐藤は同遺跡検出の同時期の貝塚と比較し、SH045 以外の 4 例がすべて 6 種類以上の魚種で構成されていることから、SH045 はカズノコ目的のニシン漁の廃棄場であると考えている。

有珠 3 遺跡では有珠 b 火山灰（1663 年降下）の直上と直下でそれぞれ 70 cm、80 cm の厚さをもつ貝層が検出されている。貝層の内容は貝と魚骨が大半で、その他の動物遺存体と道具類がほとんどない。また、下層はニシンが圧倒的に多く、有珠オヤコツ遺跡例と共通する。

さらに、道具類は中柄の未成品のみで、完成品や破損品の出土はなかった。これについて、調査者である大島は『送り場』というよりも、『捨て場』的な性格」と考えている（大島 1997）。また、もう一箇所の貝塚との間には住居が存在した可能性のある空間があり、住居を挟んで「送り場」と「捨て場」が対峙していた可能性をも指摘している。

（2）時期的変遷と地域差

以上は貝塚のもつ要素を抽出したものであって、貝塚をこれらにより分類するものではない。なぜならば、貝塚は各要素が複合した形で存在する機会が多いからである。ただ、これらの要素をもつ貝塚の、時代と地域による変化を把握することは重要と考え、現段階で考え得る変化の傾向を概略的に述べる。

縄文早期の貝塚は、東釧路貝塚でイルカの頭骨を放射状に並べた遺構が検出されており、動物儀礼場の要素が貝塚文化の初期からみられることがわかる。また、東釧路貝塚には人骨を伴う墓坑が存在するものの、貝塚と同時期であるかが判然としない。縄文早期の貝塚に墓地的要

素があるか否かは今後の検討課題である。

縄文前期は北黄金貝塚やコタン温泉遺跡に代表される墓地的要素をもつ大規模貝塚が多い時期である。また、峰山巖が、北黄金貝塚の C 地点貝塚（縄文前期）でシカの頭骨 6 個体の集中があった（峰山 1977）と指摘するように、動物儀礼場的要素も同時にみられる。

縄文中期は貝塚の検出例が少ない。その理由の一つに貝類の割合が少なく、検出しにくいことがあげられる。

函館市大船遺跡では、貝類はほとんどみられず、クジラやオットセイといった海獣類や陸獣類、魚類が出土している。これらは盛土遺構あるいは堅穴住居廃絶後の窪みから骨角器などの道具類とともに出土し、付近に焼土が多くみられるなど儀礼の痕跡がうかがえる。この時期に出現する盛土遺構が貝塚の機能を兼ねているとするのは早計かも知れないが、貝のない貝塚を含んでいることは確かであり、道具儀礼場的要素をもつと考えられる。

なお、一部の地域を除いて縄文中期及び後期に墓地的要素をもつ貝塚がみられないのは、集落と離れた場所に墓をつくるという、新たな墓制の成立と関わると思われる。

縄文後期は、戸井貝塚やポンマ遺跡のような動物儀礼場的要素をもつ貝塚が多くみられ、墓地的要素をもつものは現時点では高砂貝塚の 1 例のみである。このことは新たな墓制への移行により、多くの地域では貝塚に墓をつくるという意識が失われつつあることを示している。

縄文晩期は貝塚の検出例が極端に少なく、検討段階にない。しかし、あえてあげるならば伊達市有珠モシリ遺跡例が存在する（大島 2003）。

有珠モシリ遺跡は約 10,000 m²の小島に縄文晩期～続縄文前半期の貝塚と墓が検出されている。続縄文期の墓坑は晩期の貝塚を掘り込んでおり、逆に晩期の墓坑は続縄文の貝塚に覆われている状態であるため、一時期に貝塚と墓が重複していたとはいえない。しかし、小さな島という限られた場所であるため、ほぼ同時点に貝塚と墓が存在したといえる。さらにいえば島自体を特定の意味をもつ場所として考えていた可能性もある。このことから、これも縄文晩期における墓地的要素をもつ貝塚の可能性がある。

続縄文前半期は噴火湾東岸地域を中心に一部余市町入舟遺跡で墓を伴う貝塚がみられる。また、礼文華貝塚では動物儀礼場的要素をもつ貝塚も存在する。なお、続縄文後半期は貝塚の内容が不明なため、検討できない。

擦文期の貝塚は、有珠オヤコツ遺跡（旧南有珠 7 遺跡）SH006 で人骨が出土しており、墓地的要素の存在が指摘できる（峰山・大島・瀬川 1984）。一方、青苗貝塚はクロアワビ、エゾアワビを主体とする貝塚として有名であるが、他にもホタテガイ、ウニ、マダラ、ホッケ、アシカ、オットセイ、クジラ、アホウドリなど、さまざまなものを含んでおり、交易目的のエゾアワビ漁と廃棄場との想定は積極的にはできないと考える（佐藤 1979）。また、青苗貝塚では人骨の出土はなく、墓地共有的要素はなさそうである。

中・近世アイヌ文化期の貝塚は、13 世紀から 15 世紀の貝塚の検出例がないため、16 世紀以降の、主に近世アイヌ文化期の貝塚が対象になる。この時期の貝塚は物送り場として存在する

ことからわかるように、動物儀礼場的要素と道具儀礼場的要素の複合形態である場合が多い。しかし、17世紀の有珠オヤコツ遺跡 SH045 例や有珠 3 遺跡例のように、廃棄場の要素をもつ貝塚も同時にみられる。一方、この時期には墓地的要素をもつ貝塚は存在しないといえる。

以上のことから、北海道全体の貝塚の変遷を考えると、当初は動物儀礼場的要素の貝塚が存在し、これに墓地的要素を併せもつ貝塚が縄文時代前期まで存在した。中期以後は墓制の変化とともに貝塚と墓地は分離される。以後も動物儀礼場的要素をもつ貝塚と道具儀礼場的要素をもつ貝塚は存続し、17世紀には和人との交易に関連し、廃棄場的要素をもつ貝塚が加わるといえる。

しかし、これには地域的に差があり、一様ではない。噴火湾沿岸地域、特に東岸地域は縄文中期以後、続縄文期、擦文期まで墓地的要素がみられるなど、各時代を通して貝塚が密集する地帯では古い要素が存続するといえるかもしれない。

(3) 生業の変化と貝塚の祭祀的要素の変化

狩猟・漁撈・採集による社会であった時代及び地域では、貝塚は動物儀礼場的要素を常にもつといえる。これは生業の中心が狩猟・漁撈であるために、対象物である動物への畏敬の念から起こったであろうことは想像に難くない。またこれに、ヒトを含めた「すべての動物の儀礼の場」として考えた場合、貝塚は墓地的要素をも併せもつことになる。この墓地的要素と動物儀礼場的要素の複合形態が存在する時期は、全国的には縄文時代を中心としているが、北海道の一部のように、時代が下っても生業形態が圧倒的に狩猟・漁撈に依存している地域では縄文時代以降も残存している。

擦文期から中・近世アイヌ文化期にかけての、生業に占める農耕の割合の増加と本州和人との交易による商品経済の浸透は、貝塚の存在自体を減少させるとともに、貝塚の性格をも変質させた。つまり、地域的にでも残存していた貝塚の墓地的要素は中・近世アイヌ文化期に入ると完全に消滅し、新たに、少なくとも17世紀には廃棄場的要素をもつ貝塚が出現する。また、動物儀礼場的要素と道具儀礼場的要素は「物送り場」として存続するが、動物儀礼の内容は縄文時代から続く「動物を用いた儀礼」は減り、大半が「動物に対する儀礼」となるという変化がみられる。

結論として、生業と貝塚がもつ祭祀的要素は関連性があり、生業形態の変化は貝塚がもつ意味合いをも変化させたといえるのである。

4. 貝塚文化の終焉

(1) 近世～近代の貝塚

北海道での貝塚文化の終焉は現段階では明治時代頃と考えられる。これまでに発見されている貝塚のうち、最も新しい時代のものは苫小牧市弁天貝塚（佐藤 1989）と伊達市有珠善光寺 2

遺跡（青野・菅野 2005）である。ともに、幕末から明治時代の貝塚である。これらは骨角器やアイヌ模様の石製品などの出土遺物と、アイヌコタンの位置を記した文献資料から判断し、アイヌ民族による貝塚と考えて間違いない。

有珠善光寺 2 遺跡の 1・4 号貝塚は 15×10m の範囲に最大厚 0.20m の貝層が広がっている（第 4 図）。貝種はイガイ・ホタテガイ・アサリが主体であり、ウニや魚骨も出土している。この貝塚の時期は 1822 年あるいは 1853 年と思われる有珠山起原の火山灰が貝層中にみられたこと、コンプラビンや明治初期につくられた二分金の出土から幕末から明治時代にかけての貝塚と判断できる。貝塚には多くの鉄製品や銚頭などの骨角器、陶磁器、アイヌの自製品と考えられる石製品が点在するとともに、灰集中箇所が 5 箇所確認された。灰集中は同一地点に複数層堆積しており、下部に被熱の痕跡がみられないことから、灰を同一地点に納める灰送り儀礼を行った場所と考えられる。おそらく、その他の貝や人工遺物も送り儀礼とともに集積されたものと思われる。

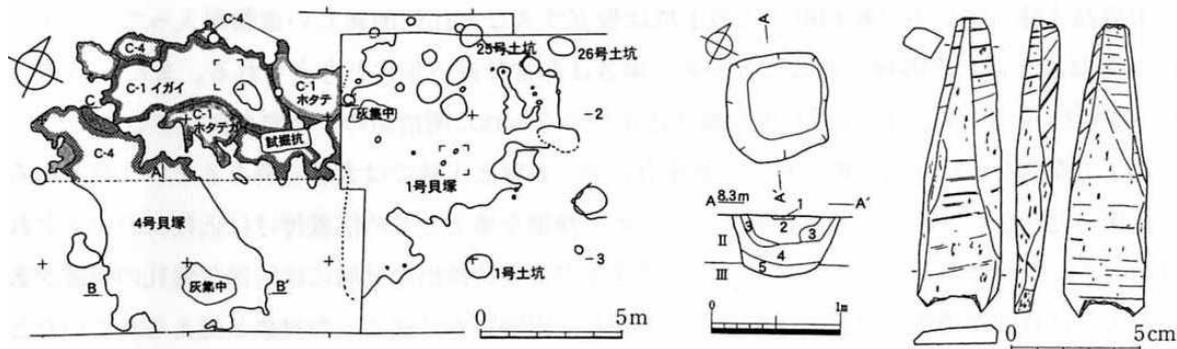
このように北海道の貝塚文化は地域を限って近代まで存続していたのである。

（2）ゴミ穴の出現

有珠善光寺 2 遺跡には貝塚と同時期かそれよりも新しい時期の土坑が複数存在する。直径 1 m 弱のそれらの土坑内には陶磁器や大日本麦酒社製のガラス瓶などが入っており、いわゆる「ゴミ穴」と考えられる。

そのうちのひとつである 111 号土坑はイガイ・ホタテガイ・アサリなどの貝や魚骨、鹿角製銚頭の未成品を伴っている（第 4 図）。この土坑はガラスなど比較的新しい遺物が入っておらず、1・4 貝塚と同じ内容物であることから、両者は非常に近い年代と考えられる。また、25 号土坑（第 4 図）のように、1・4 号貝塚を掘り込んでつくられた明治期のゴミ穴も存在する。

ここで重要なのは、内容物に対する意味合いが、貝塚と土坑では大きく異なるという点である。貝塚の意味合いは時代とともに変化するため、神聖な場としての位置付けは近代においてどれほどであったかは不明である。しかし、有珠善光寺 2 遺跡検出の貝塚には灰送り儀礼の痕跡があったように特別な場所との認識はあったと思われ、内容物も「送り」の対象と捉えられ



第 4 図 伊達市有珠善光寺 2 遺跡 1・4 号貝塚(左)と 111 号土坑(中)・銚頭未成品(右)

ていたと思われる。それに対し、土坑内の貝類及び未成品は土中に埋め隠される存在として認識されているといえる。少なくとも貝塚は日常生活の中で目に見えて存在するものであり、両者のモノに対する意識の差は歴然としている。

これらの違いの原因は、和人かアイヌ民族かという思想の異なった行為者によるものとの考えと、アイヌ民族のモノに対する意識が変化したとの二つの考えができる。しかし、筆者は111号土坑に含まれる鹿角製の銚頭未成品はアイヌ民族の自製品と考えられるため、当遺跡に限っていえば後者であると考え。このことは、縄文時代以来連綿と貝塚がつくられ続けた噴火湾東岸地域においても、これ以後の貝塚は存在せず、北海道の貝塚文化が終焉をむかえたことを考え合わせると蓋然性が高いといえる。

おわりに

北海道における縄文時代から近代までの貝塚を、生業研究と祭祀研究の両面から概観した。対象範囲も広く雑駁な内容であることは否めない。ただ、生業の変化と貝塚がもつ祭祀的要素の変化は関連性があることは指摘できたと考え。今後は同様の視点で、より緻密な貝塚の変遷過程を各時代・各地域において考えていきたい。

参考文献

- 青野友哉 2000「北海道における近世畑跡と地域的課題」『はたけの考古学』64-67頁 二〇〇〇年度鹿児島大会実行委員会編 日本考古学協会
- 青野友哉・小島朋夏 1999a『ポンマー縄文後期～近世アイヌ文化期の貝塚と集落～』北海道伊達市教育委員会
- 青野友哉・小島朋夏 1999b「北海道における近世畑跡の解釈について」『郷土と科学』No.112 1-6頁
- 青野友哉・菅野修広 2005『有珠善光寺2遺跡発掘調査報告書』北海道伊達市教育委員会
- 阿部千春 2001「大規模集落の出現—北海道南部の縄文集落—」『新北海道の古代』1 90-109頁 北海道新聞社
- 天野哲也 2003「オホーツク文化とはなにか」『新北海道の古代』2 110-133頁 北海道新聞社
- 石井 淳 1997「北日本における後北C2・D式期の集団様相」『物質文化』第63号 23-35頁 物質文化研究会
- 石井 淳 1998「後北式期における生業の転換」『考古学ジャーナル』No.439 15-20頁
- 石本省三・横山英介ほか 1999『桜町6遺跡・桜町7遺跡発掘調査報告書』七飯町教育委員会
- 宇田川洋 1985a「アイヌの狩猟—アイヌ文化期の貝塚をめぐって—」『歴史公論』114 69-74頁 雄山閣
- 宇田川洋 1985b「アイヌ文化期の送り場遺跡」『考古学雑誌』第70巻 第4号 32-78頁
- 大島直行 1984「北海道の貝塚調査」『考古学ジャーナル』No.231 20-23頁 ニューサイエンス社
- 大島直行 1997「道南の中・近世のアイヌ民族の遺跡」『考古学ジャーナル』No.425 8-12頁 ニューサイエンス社
- 大島直行 1998「北海道における生業研究の視点」『考古学ジャーナル』No.439 2-3頁
- 大島直行 2003『図録 有珠モシリ遺跡』伊達市教育委員会
- 大島直行・百々幸雄 1998『高砂遺跡』札幌医科大学解剖学第二講座

- 大場利夫編 1963「小幌洞窟遺跡」『北方文化研究報告』18 179-287 頁 北大解剖学教室調査団
- 大場利夫・大井晴男編 1981『香深井遺跡』下 東京大学出版会
- 河野広道 1935「貝塚人骨の謎とアイヌのイオマンテ」『人類学雑誌』第50巻 第4号 151-160 頁 (北方文化論 河野広道著作集I 1971 北海道出版企画センター 所収)
- 酒詰仲男 1959『日本貝塚地名表』日本科学社 東京
- 佐藤一夫編 1989『弁天貝塚』III 苫小牧市教育委員会
- 佐藤孝雄 1997「中・近世における北海道アイヌの狩猟と漁撈」『考古学ジャーナル』No.425 13-18 頁 ニューサイエンス社
- 佐藤忠雄編 1979『奥尻島青苗遺跡』函館土木現業所・奥尻町教育委員会
- 瀬川拓郎 1998「擦文文化とサケ・マス生業論」『考古学ジャーナル』No.439 21-25 頁
- 瀬川拓郎 2004「サケと交易」『新北海道の古代』3 90-93 頁 北海道新聞社
- 高杉博章 1987「擦文文化における『物送り』の信仰・儀礼」『北海道考古学』第23輯 59-71 頁
- 竹田輝夫・千代 肇・福田茂夫 1993『伊達市有珠オヤコツ遺跡・ボンマ遺跡』伊達市教育委員会
- 角田隆志 2005「高砂貝塚」北海道考古学遺跡報告会資料集
- 苫小牧市教育委員会 1989『弁天貝塚』III
- 藤本 強 1983「続縄文文化概論」『縄文文化の研究』6 10-34 頁 雄山閣
- 峰山 巖 1972「第1編 先史時代」『豊浦町史』(渡辺 茂編) 3-132 頁 豊浦町
- 峰山 巖 1977「縄文人の生活1 貝塚は語る」『大塚葉報』303号 14-26 頁
- 峰山 巖・大島直行・瀬川拓郎 1984『伊達市南有珠7遺跡発掘調査報告書』北海道伊達市教育委員会
- 峰山 巖・大島直行・百々幸雄 1986『北黄金貝塚』伊達市教育委員会
- 山田悟郎 1998a「日本列島北端で展開された雑穀農耕の実態」『北海道開拓記念館研究紀要』第26号 1-22 頁
- 山田悟郎 1998b「近世アイヌの島」『考古学ジャーナル』No.439 26-30 頁
- 山田悟郎 2000「アイヌ文化期の農耕について」『北の文化交流史研究事業研究報告』99-118 頁 北海道開拓記念館
- 横山英介 2005「焼畑の考古学—北海道における焼畑跡の考古学的分析—」『海と考古学』海交史研究会考古学論集刊行会 179-206 頁 六一書房

地域と文化の考古学Ⅱ

2008年10月20日 初版発行

編者 明治大学文学部考古学研究室

発行所 六一書房

掲載頁 pp.309-325